

75歳（1945年）

昭和二十年（一九四五年）

75
歳

目 昭和二十年一月二日（火） 金子と外彦、梅へ手紙出す。人生何時までも心配苦労の絶える事がない。人生はトراجックだ。田辺寿利へ哲研を送る。

手

昭和二十年一月三日 ◆田辺寿利（神奈川県藤沢）宛

鎌倉発

兎に角「哲学研究」に発表いたしました。しかし今これを贋写にて方々に配布したりするのは慎重に考えなければならぬと存じます。和辻君の攻撃が最近帝国新聞で始めたそうです。いずれお目にかかる御相談いたします。

手

昭和二十年一月六日 ◆務台理作（東京）宛

鎌倉発

第一。御手紙拝受。三宅君の手紙、後でよく読んで見ますから暫くお貸し願います。大兄の云われる如きことでよいのだらうと思います。どうも人は直観を誤解して居ります。（この点、実に困る）。それは内への無限の process でなければならない。とにかく君の本で大分私の云うことが分つたような人もある様です。今後大いにやりましょう。私は生命というものを書き終り（これは「思想」に出る筈）、今又数学の基礎論を書いていますが、これがすんだら一つ淨土真宗の世界観という

ものを書いて見たいとも思っています。

手 昭和二十年一月六日 ●務台理作（東京）宛 鎌倉発

第二。大拙の名号の論理。あれはとてもよいです。浄土真宗はあれで立てられねばならぬ。あれは即ち私のいう、表現するものと表現せられるものとの矛盾的自己同一の立場から考えられねばならない。そこが天地の根源、宗教の根源です。絶対現在の自己限定の底から仏の名号を聞くのです。矛盾的自己同一の場所的論理では逆対応といふことが深く考えて行かなければならぬ。私と汝と相話すのも逆対応です。「生命」論も見てもらいたいのですが「思想」が出ない。

手 昭和二十年一月六日 ●西谷啓治（愛知県豊川）宛 鎌倉発

お手紙見ました。いつまで豊川にお出でですか。どうか私のものをよく読んで見て下さい。田辺君の様に私の考え方を始めから自分の考えで定めてしまわるとすべてが誤解になってしまいます。場所の論理は観ずる論理で聖道門だと云われるそうですが、表現するものと表現せられるものとの矛盾的自己同一の論理こそ、そこから仏の呼び声の出て来る名号為本の浄土宗的論理と存じます。場所的論理に於ては逆対応といふことが考えられます。仏に対象的に対するのではありません。田辺君の如き立場からは仏の呼び声とか救済とかいうものが出て来るでしょうか。

手 昭和二十年一月六日 ●西谷啓治（愛知県豊川）宛 鎌倉発

第二。君の本をおかりした時、Ravizionをよく読んであつた様だが、私は生命論の中につつかり

SAMPLE Shoshinji.com

75歳（1945年）

Rを取り入れました。田辺君は又すぐ私の考えがシェルリングの知的直観の証拠だと云うかも知ぬが、それは根柢からの誤解です。Rの習慣は、私の作り作られる創造的な場所的弁証法の中に取り入れられて居るのです。Rの disposition (傾向) というものは無基底的な歴史的世界の自己形成の方と考えるのです。その点よく御注意下さい。一犬虚に吠えて万犬実を伝うという様なことあつて困ります。田辺君は私の論理は天上の論理だというそ�です。私の論理こそ現実の論理と思うのに。

手

昭和二十年一月八日 ●西谷啓治（愛知県豊川）宛 鎌倉発

私はいろいろな子や孫の心配に苦しめられ妨げられながらも、心を奮い起して何としても自分の考えを世に知らせ、多少とも我が国の思想界に貢献しようと日夜努力して居る。しかもだんだん老年になり行く。旧友も年を逐うて凋落して行く。私も何時とも分らない。久しく親灸した若い人々に少しでも自分の考えを理解してもらつて置きたいと思う。私の考えには實に誤解が多い。（故意か軽蔑か）。實に残念に思つてゐる。自分では自分の考えが益々明らかになって、いろいろのものが包括せられて行くとおもうが。

手

昭和二十年一月八日 ●務台理作（東京）宛 鎌倉発

三宅の手紙御返しいたします。色々云いたい事もあるが、面倒だからやめる。唯人間の迷いだけから出立せねばならぬと（田辺ハ何処ニコウ云ウコトヲ云ツテ居ルカ御存知ナラ知ラセヨ乞ウ）田辺が云うと云われるが、唯の人間の迷いから宗教があるのではない。相場師でも迷う。神があるから人間の迷いがあるのだ。凡夫との自覚は神の呼び声でないか。日本精神に論理がないというが、そ

れは西洋論理がないという事だ。生命のある所、そこに論理ありだ。

務台君

昭和二十年一月十日（水）近衛、河相、金井へ国体論。（…）
昭和二十年一月十五日（月）弥生来宿。伝公病氣に付き梅再宿。（…）
昭和二十年一月十六日（火）弥生、梅帰る。（…）

手 昭和二十年一月十六日 ●沢瀉久敬（京都宛 鎌倉発）

（…）どうも「思想」がさっぱり出ませぬので、そのうち又「哲研」へ原稿をお願い致したく存じ
居ります。「生命」は三回分を「思想」に送つてあるのですが、今に最初のものも出ないので困ります。
「生命」論の原稿のCopyを先日高山、高坂二君に托し、京都にて保管してもらう様にと渡して
置きました。「一」「二」は高山君に、「三」は高坂君に。高山君には学兄にも見せる様にと云つて置
きました。「思想」はいつ出るか分らぬ故、何卒原稿の写しにて御覧下さる様に。 沢瀉君

手 昭和二十年一月十八日 ●布川角左衛門（東京 岩波書店）宛 鎌倉発

「生命」は三回まで送つてあるのですが、少しも出ないで困ります。「思想」はいつ出るのでしょうか。
何とか方法もないものでしょうか。今一つ「数学の哲学的基礎附け」というものも百頁余書
いたのです。私の原稿をCopyして下さる方に何か礼をせねばならぬのではないでしようか。あんな
色紙でよいのでしょうか。もしその必要あらば、どうか私の原稿料の内からでも適度にお計い下さい。
「生命」「三」のCopyができましたら、又、「空間」のゲラ刷ができましたら御願いいたします。

SAMPLE Shishi-Shinsui.com

75歳（1945年）

布川君（…）

日 昭和二十年一月二十日（土）（…）金子、麻布に家を定めたと云う、一安心。しかし人生の事、あす又どうなるか分らない。（…）

手 昭和二十年一月二十五日 慡務台理作（東京）宛 鎌倉発

大学新聞の御寄書拝読。場所哲学の趣旨人に分り易くよく説いてあると思いました。場所の自己否定的に何処までも個と個と対立し相互否定であるが、この事その事が逆に自己肯定的に個と個が逆対応的に結合し、場所が作られたものから作るものへと自己自身を形成し行くことである。一面に煩惱無尽の世界は一面に仏の慈悲の世界である。大拙は極楽が娑婆に映り、娑婆が極楽に映つて居るという。私は対応ということをまだ入れなかつたが、これを入れると都合がよい。

手 昭和二十年一月二十九日 慡務台理作（東京）宛 鎌倉発

その後お変りもございました。鎌倉は今年は中々寒くて困ります。少し隙がございましたので、甚だ未熟ながらかねて思つていた様なことをとにかく書いて見ました。どうか御覽下さつて又色々御教示下さる様御願いいたします。私は矛盾的自己同一的場所の自己限定から要素とか結合の法則とか云うものが出て群とか体とかいうものが考えられるという様なことを一寸考えて見たのですが。今日数学の論理を云う人々がカントルの集合の概念、デデキントのnatürliche Folge des arithmetischen Akts, des Zählens（算術的行為つまり数える）（Stetigkeit u. I. Z.（連續性と）の始め）といったものの論理的

分析がないとおもいます。数の本質はここにあるのではないでしようか。かねて思つていたことを大まかに書いて見たので欠陥も多いとおもいますが、いろいろ御聞きしてよく考えて見たいとおもいます。又、私の哲学が背景となって居る所は簡単に云つて居るので、人に分りかねる所も多いと存じます。これは御目にかかりました節、委細申し上げます。

カントルの *zusammengehörig* (体^{（補足）}を形成^{（あつめ）}する) *insichdicht* (稠密^{（うじ）}) *abgeschlossen* (閉じ^{（し）}) というのはどう訳します。*elementfremd* (要素^{（要素を異）}) はどうか。「互いに素」としましたが、哲学では疎外などいう様ですが。それから *Durchschnitt* (部分^{（はんぶん）}) *Teiler* (部分^{（はんぶん）}) *Normalteiler* (正規部^{（せいぎぶ）}) などの訳が分らずよいかげんに訳して置きました。唯今下村君より学兄の訳語を知らしてくれましたが。「四」のはじめの所の $0^{客と} \cdot 1$ との関係は数学者は何と云われるか知らぬが。体というものの成立には何かそんな所がないでしょうか。 西田生 宗綱学兄

どうか下村君と御一緒にいろいろ御教示願い上げます。

手

昭和二十年一月二十九日



下村寅太郎 (東京) 宛

鎌倉発

御手紙拝見いたしました。京都の方へお出でになつて居られました由。論文は今日とにかく末綱君の方へお送りいたしました。どうか御覧下さつて色々御批評願いいたします。君の云われる様に自然数からでなく私の場所論理の立場からして先ず矛盾的自己同一的場所の自己限定として要素とか結合の法則とかと云うものが出て来、それから群とか体とかいうものが考えられる様なことを一寸考えて見たのです。極めて未熟な不十分なものですが、或いは君の企図せられる所と一脈相通ずるものあるかにおもい喜びに堪えませぬ。何とか御互いに話し合つて考えて行つて見たいと存じ

SAMPLE
Shishin.com

75歳（1945年）

ます。私は数学の基礎などいう人々がカンタルの集合概念（或いはデデキントの arithmetischer Akt
（算術的行為）の論理的分析をやって居らぬとおもいます。そして唯形式的論理から数を考えようとして居る。それでは全くダメです。末綱君もどうも自然数というものが基いとなつて居る様です。

下村君（…）

手 曜和二十年一月三十一日（水）（…）大拙より芋。（…）
日 昭和二十年二月四日（日）「場所的論理と宗教的世界觀」をはじめ。（…）

手 昭和二十年二月六日 ●鈴木大拙（円覚寺）宛 鎌倉発

風はいかが。もうすっかり直ったか。十分に用心し玉え。老人に肺炎は危険危険。日本の靈性と大灯百二十則ありがとうございます。日本の靈性は眞に鎌倉時代に至つて覺醒したと思います。務台も大喜びでしよう。才市という意外な妙好人があつたものですね。誰にも知られなかつた人でしよう。

手 昭和二十年二月六日 ●沢瀉久敬（京都）宛 鎌倉発

二月二日の御手紙拝受いたしました。原稿はすべて御落手下さいました由、安心いたしました。図解はこれで結構でござります。何卒この図を御用い下さいまして。雑誌出版ますます困難となり、実に困つたものと存じます。万一むつかしくてもあの原稿だけはどうか大事に御保存御願い申し上げます。京都もそろそろ空襲が来そう故。あの論文は從来数理哲学者の未だ着眼していなかつた新し

い着眼点から論じたものとして、今は数学者や哲学者には分らなくとも、私は深く後日に期待し居るものでございます。もう老人となつて再びかくと云うこともできませぬ。又、私には他に多く書き残して置きたいと思うものあります故これきりと存じます。今は一寸宗教について書いて居ります。「生命」の原稿をおよみ下さつてお出での由、何卒又御考えもお渡して下されたし。尊兄は医学校にて生命の事お講じになつて居らるにや。何かと参考にもなれば幸と存じます。「思想」の方にては今月中には最初の一回だけは出したいと云つていますが、二、三回の方はいつになりますか。尚一度布川とも話しあつて見たいとおもい居ります。 西田生 沢瀉君

日 昭和二十年二月八日（木）（：）得能文死去。

手

昭和二十年二月八日



下村寅太郎（東京宛 錄倉発

御手紙拝見。本当にあの論文は今の数学者にも哲学者にも分らないとおもいます。どうか君だけでも分つていて下さい。自然数と云うものが物を数える行為的直観的な型だと云うこと。カントルの集合の概念の中に作用が含まれて居ると云うことが着眼せられねばならぬとおもいます。君の論文通過の事、先日京都の方より一寸聞きました。田辺君も今月三日にて停年の由。
集合概念の論理的分析というものがまだできていない。

日 昭和二十年二月十一日（日）（：）午前我が家の上空、敵機落下の如きものを見る。入浴。きょう午後三時のラディオ、ドイツ軍事評論家の言として曰く、ドイツはベルリンを失つても破れた

SAMPLE
Shisho-Shinsui.com

75歳（1945年）

ことにはならない。フランスのパリの敗北、イギリスのダンケルク敗北とは違う。十二月西部の反撃によつて世界を驚かした如く、又ロシヤがモスカウで盛り返したと同じく盛り返すと云う？我が国で新聞は比島に出て居るものがアメリカの太平洋の戦力の最大限と云つて居るが。徳富はアメリカは人的資源が尽きて居るという。

● ● ● 昭和二十年二月十二日（月）滝沢へ国体論。（…）

● ● ● 昭和二十年二月十三日（火）（…）波木居「新秩序」の原稿持参。

昭和二十年一月十四日（水）極楽寺まで行つて見たが梅未だ開かず。菅へハガキ。「ヤヨヒキトク」の電報。住吉へ電話。

弥生午前八時四十五分絶命。

● ● ● 昭和二十年二月十六日（金）敵小型百数十機侵入、飛行場等爆撃。前面海上にも敵機攻撃。砲声殷々。午後二時、弥生葬式の筈。（静、静岡へ）。敵何百機と入り代り立ち代り侵入、終日砲声殷々絶えず。空母十数艦隊三十何隊を以て近海に迫り来たり、延べ千機を以て来襲せりと云う。四月二十五日サンフランシスコ会議。

手

昭和二十年二月十六日 ● 上田操（静岡）宛 鎌倉発

弥生の事、本当に何と申し上げようもございませぬ。私も何とも云いようもない淋しさに堪えられませぬ。近年特に親切にどの子供よりか一番あたたかく孝養を尽してくれたのに。尊兄には誠に御気の毒に堪えませぬ。

手

昭和二十年二月十六日 ●上田操（静岡）宛

鎌倉発

只今端書をさし上げました後にすぐ御手紙を拝見いたしました。弥生病氣死去の状を審かにいたしました。誠に哀れなことでした。尊兄にもいかばかりにお悲しみの事と深く御同情申し上げます。全く近来色々の心痛な事情が相続して起り、心身を疲労せし結果かとも存じます。それにしても御手紙の様にいろいろの手をお尽し下され、私としては何の遺憾もございませぬ。本当にありがたく存じます。誠に誠に天命とあきらめる外ありませぬ。前のハガキにも申し上げました如く近年は特に親切に厚き孝養を尽してくれ、子供の中にて一番にかけ替えのない子とたよりにいたし居りましたのに、突然にこういうことになり何とも云い様のない淋しさを感じて居ります。思い出す毎に胸迫り涙を催します。尊兄にも本当に突然の事にいかばかり御驚き御悲しみの御事と存じ上ります。又これから如何ばかり御困りの御事と御気の毒に存じ、深く深く御同情申し上げます。誠にすまないことには成りました。子供等はどうしていますか。それぞれ成長して居たのがせめてもの慰安ですが。子供等も淋しく、又将来色々困ることと存じます。正などまだ漸く中学の事故。私もせめて死に顔でも見たく飛んでも参りたいのですが、御存知の身体の状態でもあり、又かくの如き時節の事故、割愛いたします。今頃は丁度葬式の時かともおもい、筆を取り居ります。きょうは又関東の方ははじめての大空襲の様で、前の海の方にても砲声殷々たるものがあります。葬式も無事にすみましたかしら。本当に彼が死んで御互いに淋しきことになりました。

上田操様

御多用の御体にこれから何事も御不自由の御事と存じ、御健康案じられます。何卒御大切に。

手

昭和二十年二月十六日 ●西田静子（京都）宛

鎌倉発

SAMPLE
Shinsui.com

75歳（1945年）

弥生一昨夜（十四日夜）急死にて死去。本当に驚いた。胆囊炎とかいう病にて、非常に苦しんで死んだそうだ。その前日（十三日）まで何ともなかつたらしい。近來は誠に親切にあたたかく孝行をつくしてくれたのに、かわいそうなことをした。何とも云いようのないさびしさを感じて居る。先月十五日に来て梅と二人で宿し元氣で帰ったのに。

手

昭和二十年二月二十日

●上田久（静岡）宛

鎌倉発

お母さんが亡くなつて誠に御氣の毒です。さぞ御悲しみの事と存じます。どうかこれからしつかりやつて下さい。お父さんもさぞ御弱りのことと存じます。どうか何かと氣をつけて上げて下さい。薫出征中のこと故、お前が万事その代りのつもりで弟のことなども。それから静子おばさんはお前もまだ顔色がわるくやせて居ると云つていました。これからよくよく自分の体のことを気をつけねばならぬ。この上何かの事があつてはならぬ故、お前のあの病気は直つた様で中々直らぬもの、少しでも無理をすればすぐ又出るもの故、よくよく注意せねばならぬ。滋の手がまだ直らぬ様なら一年休学させたらいかが。その代り正を秀才教育の方へやつたらとおじいさんは思います。お前もういう時のこと故、万事お父さんの云われる様に技術将校の方へ行くがよい。我見を張つてこの上親に心配をさせない様に。お母さんもいろいろの心配で心身疲労して病気になつたものと思う故。

じじ 久殿

手

昭和二十年二月二十一日

●西田麻子（東京）宛

鎌倉発

お手紙ありがとうございました。弥生の死は誠に突然にて驚きました。近年は特に親切に孝行を

尽しきれ懐しく思つていたのに。何とも云い様のない淋しさと悲哀に沈んでいます。しかし私はしつかりして います。自分でなければならぬ仕事を少しでも多くして後にのこして置きたいとおもい居ります。梅の方も多少落ち着きました由、安心です。

手 昭和二十年二月二十五日 ●西田外彦宛

弥生の事は何としても思い出され、無限の淋しさと深き悲哀に沈んで居ります。私も七人の子供をもちましたが、もはや四人は私に先立つて逝き、あと三人になりました。幽子の死にはじめて子を失いし悲哀を味わい、弥生の死に子に先立たれし老人の悲哀を知りました。どうか残る三人相親しみ相助け、共に美しき情愛の生涯を送つて下さい。私はもう年老いて何もできませぬ。又、何時死んでもよい。唯、私でなければならぬとおもう仕事が多く残り居り、これだけはできるだけして置いて後世にのこしたいとおもい居ります。父 外彦殿
ランケに本のこと承知したと云つて下さい。どうもランケが一番字が上手だ。

手 昭和二十年三月一日 ●牧健一(京都)宛 鎌倉発

日本語の物と事とを一つにして「もの」事物から「法」が出るというのは面白かろうとおもいます。血は (神聖なる) divine blood として歴史的形成的意義を有させたい。近藤君にはお逢いでしたか。

手 昭和二十年三月三日 ●鈴木大拙(円覚寺)宛 鎌倉発

御手紙ありがとうございます。弥生は一月半ば頃達者で来て一泊して帰りましたが、先月十四日突然危篤の

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

75歳（1945年）

電報、つづいて死去の電報参り誠に驚きました。人生の事、今夕も図り難し。ほんの一日位の病にて絶命致しました由。近来特によく気をつけてくれたので無限の淋しさと悲しみに沈んでいます。Hebrew Religion の歴史的発展などよく書いたものがインド教にそう云うものがないかと存じます。空襲には実に閉口。極楽寺の方へ高射砲の破片など墮ちた由。

手

昭和二十年三月三日

木村素衛（京都）宛

鎌倉発

（…）昨日静岡の上田操が来て（弥生死後）いろいろ話を聞きました。上田の末子正と申すもの、あれは将来の事は分りませぬが今の処一寸見込みのあるものとおもいます。今特別に数学を教わりに行つて居る先生も、今中学二年にかかわらず高等学校の数学ができると申して居る由、もう今度から工場へ行かねばならないのだが惜しいものと思います。京都で秀才教育の企てがあるとかお話をあつた由、何とかしてその方へ入れる訳に行きますまい。御尽力御願い申し上げます。故弥生も望みを属しいたことでもあり、何とか御願い申し上げます。 西田生 木村君

日

昭和二十年三月七日（水） もうだんだん野菜もなくなる、野草にても食う外ない。（八木といふ人は武器心配ないというが）。

手

昭和二十年三月九日

布川角左衛門（東京 岩波書店）宛

鎌倉発

御手紙拝見いたしました。お店の方は無事でございました由。しかし精興社の方が焼けました由にて第六論文集の方はいかがと案じていまつたが、果して焼けました由、残念でした。原稿はとに

かく一度「思想」に印刷せしもの故、元の「思想」があり、「空間」の方はこちらに原稿のままございます。Copyの方はいかがなりました。これもなくなりましたか。もう校正も大体すみ居りました由なるに惜しい事をいたしました。「思想」へ送りました「生命」の方はいかがでしよう。「思想」も精興社の方の由故、多分これも焼失と存じます。しかしこれも小生の原稿はこちらにございます。それから尚大分第七論文集へとおもい大分原稿をかきましたが、当分印刷もむつかしきと存じます。實に遺憾千万と存じ居ります。尊兄には色々御配慮を御煩し致しありがたく存じます。小石川の岩波の隣へ御転宅の由。どうもこれから郊外との交通もだんだんむつかしくなることと存じます。

布川君

手 昭和二十年三月十日 翻 布川角左衛門（東京 岩波書店）宛 鎌倉発

第四論文集の再刷の方はいかが。此方は早くできますか。ファラデー二出たら願います。この状態でも印刷の方 御健闘御願いいたします。私も矢石の間に於ても仕事を後世に残すつもりでいます。

生きながら死人となりてなり果てて心のまゝにするわざぞよき（無難禪師）。

手 昭和二十年三月十日 翻 末綱恕一（東京）宛 鎌倉発

過日は空襲やら込合いやら厄介な中をお出で下されありがとうございました。いつも空谷の跫音の様に存じます。先日の論文は唯こういう様なものでもないかとぼんやりした考えをとにかく書いて見たものでございます。数学の事実内容については全くの門外漢にて、何とも致し方ございません

SAMPLE
Shishi-Shinji.com

75歳（1945年）

ね。その根本的概念という様なものについて少しでも考えて見たいとおもい居ります。Potenzmenge
(合集)についての御疑問の処は多少その疑問のある所が分る様に思います。それから先日どうとか云うことをかいて見ろという様なお話があつたかと思いますが、どういうことでしたかしら。いつかの御手紙に超可附番数の対応等値という様なことが問題となるという様なことがあつたかとおもいます。私も自然数というものが数学の根本となり、そこから数が創造せられると思うのです。（「五」に一寸ふれた様）。矛盾的自己同一的場所が純記号的に自己自身を限定する根本形が自然数的なものでしょ。しかし自然数というものが既に自己形成的であり、自己否定的に超自然数的発展を含んで居るものではないかと思うのです。数であるか否かは自然数まで返つて見なければならぬのかも知らぬが。又いつかお目にかかりました節伺います。しかし昨夜も大空襲ありし由、この頃の様では。

西田生　末綱君

お暇の時又問題をお与え下さる様。第六論文集は校正済の処を精興社で焼けてしまいました由。
(元の原稿は私方)。

手

昭和二十年三月十一日 ● 高山岩男

(京都) 宛

鎌倉発

御手紙拝見いたしました。御宅の事心配していましたが、それでも皆々よくなられました由、安心致しました。東京は実に大変の様です。誠に氣の毒なものです。敵機は時々私共の頭上を通りますが、ここには投弾はせない様です。京都は今の処無事の様だが、これも中々分りませんよ。総力戦などこれでは全くだめですよ。もつともと日本人は systematic に組織する訓練ができるなくしてはだめです。従来全くそんな教育ができていなかつたのです。俄かに泥縄的なことを考えててもだめ

でしよう。私はこの際実に心配いたし居ります。これには實に大決心をせねばならぬ時ではないかと存じます。このままに引きずられて行つて足腰も立たない様になつては民族生命もだめになつてしまわなかると存じます。何としても我々民族がどうあつてもこの際精神的自信を失う様なことがあつてはならないと存じます。力でやられても何処までも道義的に文化的に我が國体の歴史的世界性、世界史的世界形成性の立場だけの自信を失わず、固くこの立場を把握して将来の民族発展の自信を持たす様にせねばならぬと思います。

先日例のK君がこちらへ来訪せられました故、この事を論じ、同君も全く同意見でしたが、同君もどうも何ともできない様なので。私はどうもこの外に将来の途はない様に思います。そこで私は君方に一言したいのですが、君方は一つこの出立点となる深大なる思想学問の根拠を作らねばならぬと云うことです。私はK君の問い合わせに対し、断じて日本人に可能だと云つて置きました。唯力にのみ依頼して居ればきっとだめになります。この事は高坂、木村、西谷、鈴木等諸君に御伝え置き下さい。私はもはや老骨、何時とも知らぬ身の上ですが、唯これを念として努力して居ります。今、宗教論を書いて居ります。(先日数学論を沢瀉に送つて置きました)。できるだけ書き残します。

唯、残念なことには先日神田の精興社が二十五日に焼けて、第六論文集は丁度校正がすんだ所で焼けてしましました。「思想」もそこから出していまして「生命論」ももう一寸と出る見込みもないかと存じます。何とかして今書いて居るものを見つけて置きたいと存じますが。拙稿は今度「日本的靈性」(大東出版社)というものを書きました。大変面白いと存じます。例の論文集補遺、もう五、六冊位あつたら送つて下さい。

上田の妻、私の長女が突然死亡して私もがっかりいたしました。胆囊炎とかいう病気にて、色々

SAMPLE
Shashin sui.com

75歳（1945年）

手

昭和二十年三月十一日

鈴木大拙（円覚寺）宛

鎌倉発

の心痛苦勞のため心臓が弱つていましたため、ほんの一日前の病氣にて絶命いたしました由、近年は殊に親切に孝行を尽してくれましたのに、いかにも懐しくおもい、老年に云い様のない淋しさと悲哀に沈み居ります。私もだんだん老衰し行く様です。何卒御大切に。皆々によろしく。
君もこちらへ出て来る如きこともなきか。（京都市立山之学館助教の上田一郎君に贈る大拙の詩歌全集「大拙詩歌全集」）
高山君

一昨日は折角御出で下さいましたのに最初から行き違い、それに人が来たりして十分お話をできず残念でした。私は今宗教のことを書いています。大体從來の対象論理の見方では宗教というものは考えられず、私の矛盾的自己同一の論理即ち即非の論理でなければならぬと云うことを明らかにしたいと思うのです。私は即非の般若的立場から人というものの、即ち人格を出したいとおもうのです。そしてそれを現実の歴史的世界と結合したいと思うのです。唯、今雑誌に出すことができず誠に困ります。まだ半分位ですが、できましたら原稿かCopyかで御覧に入れたいと存じ居ります。君の「日本的靈性」は實に教えられます。（無念即全心は面白い）。私は論理と結合するため自己の存在を主語的方向からとか、述語的方向からとか云つて、一寸普通に分りにくいかも知れませぬが、これは説明すれば何でもありませぬ。主語的とか述語的とか時間空間というのはどうも論理を弄する様ですが、これらとの関係を明らかにして置かないとどうも学者を一言も云わさない様に説服することはできませぬ。

一昨夜の東京の空襲は大変であつたらしくですね。

君の「日本的靈性」を神田へ買いに行つたといふのは、文理大学に居る務台の下の哲学教授の

東京都杉並区和泉町四七五 京都哲学出
都に居るものには誰かに御送り下さいましたで
うのです。もし二冊も余裕あらば、その方へ御送り下さ
たのなら皆読むだろうと思うのです。（高山岩男の所は京都市左京区北白川平井町二三）。 大拙君

手

昭和二十年三月十二日

◆鈴木大拙（円覚寺）宛

鎌倉発

盤山宝積が刀をふりまわして無心即全心とい
うのは大変面白い。あれは何にあるのですか。君の
無位の真人論も見たいものだ。生死即涅槃と、君の生死が不生、不生が生死と同しと見てよいか。

手

昭和二十年三月十四日

◆長与善郎（神奈川県小淵村）宛

鎌倉発

御手紙ありがとうございました。その後いかが遊ばされたかと存じながら御無沙汰いたし居りました。
お変りもなき由。弥生死去につき深き御同情を忝うし感佩の至りに堪えず、厚く御礼申し上
げます。一月半ば頃達者でまいり一泊してゆきましたが、先月十四日突然ヤヨイキトクの電報、続
いて死去の電報まいり、私も実に驚きました。胆囊炎とか申す病気にて非常に苦しみ、昨年来いろ
いろ子供（二男）の病気、負傷（三男）、出征（長男）とて心身疲労していたもの故、心臓弱り居り、
ほんの一日位の病気にて絶命いたしました由。近年来近くにいて特に私の為、親切に気をつけくれ
ましたのに。私も言い様のない淋しさと深い悲哀に沈み居ります。老年にして子に先立たれた悲哀
をしみじみと味わいました。

我が国の現状については一々尊兄の御手紙と御同感。實に實に憤慨の至りに堪えませぬ。不幸に

SAMPLE
Shinsui.com

75歳（1945年）

して私共の予見していた通りになりました。田舎者共の世界みずの驕慢無暴の自業自得の外ありません。しかも今日に至りて尚總理以下、空虚な信念を号呼して居るに過ぎないであります。こんな風にして國民が引きずり引ずられてどん底に陥し入れられて國民が全く自信を失つてしまふ様では、もはや再起の途もなくなりはせないかと恐れるのです。私は國体を武力と結びつけ、民族的自信を武力に置くというのが根本的誤りではないかと思うのです。古来武力のみにて栄えた國はありません。武力はすぐ行きつります。永遠に栄える國は立派な道徳と文化とが根柢とならねばなりません。我が國民、今や実にこの根柢から大転換をやらねばならぬ時ではないでしょうか。外交も何もかも無視した武力一片に國民を指導して、さて武力がだめになつた時、國民は何處に自信の根柢を有ぢ得るであろうか。自信を失つた國民こそ實に亡國の民です。縱し國家が一寸武力的に衰えても高い大きな立場に於て國民が自尊心を有つならば、必ず又大いに再起するでしょう。私は日本國民は相當優秀な國民と信じます。唯、指導者がだめであつた。殘念の至りです。そして学者も文學者も深く考う所なく唯これに便乗追従するにすぎませぬでした。私は今日程國家の思想貧弱を嘆じたことはありませぬ。私ももう老年、もう何年生きのびるか分りませぬ。特に今日の如き生活状態にては。何とか若い人々の奮起をいのります。東京の事、實に悲惨酸鼻の至りに堪えず。

長与君

手

昭和二十年三月十五日

沢瀉久敬

（京都）宛 鎌倉発

御手紙拝見。いろいろ御配慮誠にありがとうございました。私もそれは望ましいのですが、要するにこれ等の論文は第七論文集として岩波で出すことになつて居るので、その関係がどうなるかが

一寸考えられます。この前ちょっとそんな話があつた時、布川など大反対でやめました。そういうことで岩波ともよく相談せねばなりませぬ。とにかくそちらの方の話を御聞かせ下さい。

第六論文集 「物理の世界」から……「デカルト哲学について」及び未出版の「空間」論

を昨冬から布川が努力して精興社で出すことにして居り、先月末校正済になつて居た所を二十五日爆撃でやられました。「生命」の方は「思想」十月号で「一」だけ出ましたが、「二」「三」はこれも校正済みの所をやはり精興社で同日にやられました。これでどうなりますでしょうか。右の如き次第にて誠に困ります。

京都、大阪の方もだんだん危険になるのでないでしょうか。もう大阪はやられた様ですね。「数学的基礎附け」、あれはそちらにあるのがOriginalゆえどうかよろしく願います。どうもこれからCopy等を作つて置かなくてはならぬとおもいます。(そう云うものできませぬか)。どうか高山君などと御相談、これの方よろしく願います。もはや昔のマニユスクリプト時代になりました。いずれ私も又いろいろ考えます。取り敢えず。沢鶴君
高山、高坂君らによろしく。

手

昭和二十年三月十八日

◆鈴木大拙

(円覚寺) 宛

鎌倉発

この頃の電車ではとても出られない。私の論理からそういうことも出そうですがまだまだ。終りにでも一寸そんなことにも触れて見たいとも思いますが。とにかく般若即非の論理というのは面白いとおもいます。あれを西洋論理に対抗する様に論理的に作り上げねばなりませぬ。そうでないと東洋思想と云つても非科学的など云われて世界的な力を持つてない。

75歳（1945年）

禪に矢が矢をささえる（^{（フシ）}語）があつた。御教示を乞う。

手 昭和二十年三月十九日 眉堀維孝（東京）宛

鎌倉発

その後どうしてますか。東京は大変の様ですね。君の辺りは無事か知らぬが。ここも無事だが。しかし上陸といふこともならばこの辺は危険、かつ第一食物にも困るだらうからと云うので郷里のものが心配し、昨日も来て切に郷里に帰ることをすすめるが、どうしたものか。とにかく東京が危険故、孫共をここに集めるつもりだ。多分君も御存知かと思うが、上田操の妻、小生の長女が二月半ば頃急死してこれにも実に困つた。

手 昭和二十年三月二十一日 眉沢瀉久敬（京都）宛

鎌倉発

阪神の方も中々危険の様ですね。京都の方も油断できないと存じます。今はどうも出版など考えて居る時期ではないと存じます。高山君の方へも端書を出しましたが、急いでCopyを作つて下さいますまいか。あの原稿一つ故、なくなつては何とも致し方ございませぬから。

手 昭和二十年三月二十三日 眉沢瀉久敬（京都）宛

鎌倉発

御手紙及びおハガキ拝受。色々御配慮下され、特に柱^柱げて印刷に附し下され初校もすみました由、御芳情殊にありがたく、深く深く安心いたしました。それなら無論Copyなど入りませぬ。御ハガキの如く校正ができましたら二、三部お願いいたします。御手紙に今一つの論文はあるのは、今書いています「場所的論理と宗教的世界觀」のことございましょう。これは私の最終の世界觀とも云

うべきもので、私に取つて実に大事のものであり、又是非諸君に見てもらいたいと思うものです。これはまだ来月一パイもかかる様です。この方はとても印刷の見込もありますまい。これは何とか少數の部数でも作りて見てもらう方法もなきものにや。たとえば謄写版とか云うもので。別紙の御訂正はあれで結構です。今度は尊兄に色々御手数をおかけいたし、誠に誠に相すみませぬ。　沢瀉君不用の原稿はどうか君の所に保存して下さい。

手

昭和二十年三月二十三日

●島谷俊三宛

お手紙拝見いたしました。「思想」もどうも出すことがむずかしいとおもいます。係のものはやる様努力するとは云いますがダメでしょう。沢瀉君の話に、弘文堂も中々手が足らずダメらしいです。私は何か謄写版の如きものにして多少の部数を作ることもできないかと思うのですが。私は今一つ「場所的論理と宗教的世界觀」というものを書いて居るのです。四月一杯かかると思います。これも小生最後の考え方（宗教觀）をかいたもので諸君に見てもらいたいと思うのですが、とても印刷の方法もないかと存じます。謄写版と云つてもこの頃は中々むずかしいそうですが、京大などで何とか方法なきものか、一つ高山君位に聞いて見ましよう。

私ももう老年になり何時とも分りませぬが、この頃になりて思想が熟したとでも云うべきか色々の考えが浮んできます。そして從来解決のできなかつたいろいろの問題が、私の立場から解決できる様に思うのですが、今日の如き状態にて誠に残念です。しかしできるだけ書き残して置きたいと思ひます。生前にむづかしくても、どうか諸君によつて後に整理出版せられんことを望みます。私は実に決死の覚悟を以てペンを取つています。我が国はいづれにしても實に一大転換の時期に迫つ

SAMPLE
Shisho-Sinsui.com

75歳（1945年）

て居るのではないかと存じます。我が国民の國体的自信を單に武力にのみつなぎ居るのは、将来に世界的發展の希望はないとおもいます。もっと高い立場即ち歴史的世紀形成の道徳文化の立場に置かねばならぬとおもいます。万一不幸にして戦に利あらずとも、国民的自信を失うことなく又大いに再起の時あらんとおもいます。こういうことも大いに考えますが。これから空襲は益々烈しくなるとおもいます。信念ばかりでも心細いものです。

日 昭和二十年三月二十六日（月）（：）旧約のエレミヤをよむ。所感多し。

手 昭和二十年三月二十八日 ●務台理作（東京）宛 鎌倉発

手 御手紙拝見。とにかく岩波へ聞き合せ居ります。まだ返事来ないが。この辺、戦場になる危険ありなど噂あるので一時動かされました。又大分慎重に考えて調べて行かないと、老人二人きり知らぬ所に行つては色々困るのではないかとも思い、又第一私は冬ストウーブでもなければ寒い所ではとても立ちゆかぬとも思い、迷い居ります。国史大系とカント、御落手下さいましたか。

手 昭和二十年三月三十日 ●末綱恕一（東京）宛 鎌倉発

二十七日の御端書拝見。いろいろ御親切の段、深く御礼申し上げます。岩波、務台などにも頼み一度疎闊の覚悟もして見ましたが、その後よく考えて見ますと女中が帰ると申し、老人二人になりましてはその辺でとても親切に世話してくれる人でもなければ不案内の地に参りましては非常に困りはせぬかと存じ、も一つは秋頃までならとにかく、冬をもと云うことになると私の如き老年には

とてもやりきれないかと存じ躊躇いたし居ります。

手

昭和二十年四月四日

●沢瀉久敬

(京都)宛

鎌倉発

三月二十九日の速達の御手紙拝受いたしました。数学哲学の校正刷はそれで結構でござります。何卒よろしく。先便申し上げました様に、岩波では今度焼失した第六論文集を再びやると云いますから、それで私はこれをそれに附加しようと思ひます。尊兄のお直し下さった校正刷をその原稿に用います。この方の原稿は哲研の方にて発表して下さいますし、又この度岩波で第六論文集に入れてくれるとすれば、別に創元社で出すに及ばぬと存じます。前便で申し上げました様に「生命」の方、とにかく岩波の方にて「思想」に出すと云つて居るのですが、東京の方は危険なきを保せれども、それでも一つCopyでも作つて何處かに保存して置いてはいかがかと思うのです。創元社でもよいが他日、岩波との問題を起す様になると困ると思ひます。その辺よく御考慮下されたし。御訂正は無論その通り。 西田生 沢瀉君

創元社でどういうか。又私の名で創元社から出すと岩波に対して一寸困るが。誰かの名で private printとして皆で分つという様な事いかが。

日 昭和二十年四月六日(金) 鈴木貫太郎大命拝受。ソ聯、日ソ条約破棄通告。小磯、数日前ガダルカナルまで取り返すと、自信ありと云い、舌根乾かざるに辞職、國民を欺くもの甚だし。ソ聯と米英と、ドイツの東西より迫り、將にドイツを中断する形勢。然るに尚ドイツは敗れないと云う。(…)

SAMPLE
Shishi-Sho.com

75歳（1945年）

日 昭和二十年四月八日（日）（：）鈴木總理、日露戦争の時、世界が日本の敗けと思ったが勝つた、今度も勝つという。（国際関係が大分違う様だが）。日本の政治家は外交無視、あまり武力のみ見ていなか。判断あまりに抽象的。

手

昭和二十年四月八日 高坂正顯（京都）宛

鎌倉発

三十一日の御手紙漸く昨日拝受いたしました。図書の疎開にて御多忙なりし由。いずれ京都の方へも行くでしょう。人文科学研究所では原理的のものをも自由に御研究の御考えの由、誠に喜ばしく存じます。どうしても原理的のものを深く研究せないと、現実の諸問題も唯その皮相を見るのみにて、深くその真実を掘ることはできないと存じます。我が国の政策の観念的、独善的にて現今の大難局に陥つたのも一に我が国民及び政治家に深い思想がなかつたからと存じます。学業奉還など実に馬鹿げたことを云つたものです。今こそ真に深く学問に心を潜むべき時ではないでしょうか。無論今は学生にもその余裕はございませんまい。しかしかかる時こそ大いに新たなる学問の発展を念とすべき時と存じます。今日国体ということを唯武力に結合し居るが、国体というものをもつともつと高い立場に置かねばならぬとおもいます。小泉信三などまでが国家あつての学問と云つて居るが、それはその通りであろう、しかし道義、文化に基礎を置かずして永遠の国家発展はあり得ないと思うのです。一時の時勢のために迷わされてかかる根本的思想を誤つてはならないと思ひます。表面は武力によつてと思われても、古来唯武力のみにて起つた国はないのです。必ずやその根柢にはいつも道義と文化があつたのです。唯武力のみに自信を持つ國は、一旦武力的に不利ならば國民は全く国民的自信を失つて失望落胆、如何なる状態に陥るか、實に寒心の至りに堪えないのです。これ

に反し高い立場を何処までも失うことさいなれば一時は万一家不運の時あるも、必ず再起、大いに発展の時が来るときもおもいます。道義、文化の立場に於て眞に東洋に大なる使命を有つて居るのではないですか。本当の日本はこれからと存じます。然るに今日少しでもこういう所に着眼する人

のないのは悲しむべきことです。ウラヘ

書物の事はいつも御手数をおかけいたしませぬ。Althaus, *Die letzten Dinge* (終) はどうしてな

アルトハウス

いのでしょう。どう考へても誰にかしたか覚えがないが。洋間の窓際のC本棚の上の方の棚に大きくて入らなかつた故、下から一段目位の所 美学の本など入れてある向つて右の方に入れて置いたと思うのですが。美学の中に混入していなゝかしら。学校の方の本は学生が借りて居りましたら決して一応返さなどなさらない様に願います。もう宗教論も一応書いてしまいましたから。万一家不運にかかるを得ば誠に喜ばしいが、この頃のこと、決して御無理なされない様に。東京は実に危険です。その上旅行も中々困難でしよう。何時何処で留められて動けなくなるかも知れませぬ。

高坂君

手

昭和二十年四月十日 ●島谷俊三宛

「生命」印刷の件は御言葉に甘え色々申し上げましたが、元來かかるることはこの頃のこととて無理なことに思われ、強いて御配慮下されない様に願います。決して無理にもという如きことなき様に。プライベート・プリントといふことも、この節そんなことをしてよいかどうか、差し支えなきものかどうか。上田によく御相談下されたし。

SAMPLE
Shoichi-Shinsui.com

75歳（1945年）

手

昭和二十年四月十一日

島谷俊三宛

八日の御手紙只今拝誦いたしました。「生命」の印刷の件は、私も尊兄のお考えが甚だよろしく、どうかそういう様にいたしたく希望致します。とにかく五十部位でもよいと思ひます。而して名目を尊兄の哲学講義の教科書代用のプリントとする方法、妙案かと存じます。何とでも然るべき名目をつけて出版法とかいうものに触れない様に御注意下されたくお願いします。京都の木村、高坂等の方、東京の務台、下村などへの御顧慮、その方は私よりそれぞれ話しますから決して遠慮なき様に願います。早速お取計い下さる様願います。費用の方はどれ位入用でしょう。その方私にて考えて見たいと存じます。大凡の所お知らせ下されたし。原稿は私の方に元のものがありますから何時にもお送り致します。

手

昭和二十年四月十二日

久松真一京都宛 錄倉発

いかがなさいましたかと存じ一寸葉書を上げましたが、後で御手紙を拝受いたしました。お変りもなき由。こちらでも毎朝零度内外でした。京都はまだ無事の様ですが阪神も大分やられた様ですね。東京は実に慘憺たるものとの様です。ここも始終B29が頭上を通りますが爆弾は落しませぬ。皆々私にも疎開せよとやかましく云いますが、すべて天に任せています。もう老い先も短きこと故、ヘーダルがイエーナでナポレオンの砲弾を聞きつつ現象学を書いていたというつもりで、毎日決死の覚悟を以て書いています。生命論の次に数学哲学の論をかき、今丁度私の宗教の考え方の大体を書きました。「場所的論理と宗教的世界觀」という題です。これは是非尊兄に見てもらいたいものです。「生命論」論、長く書くつもりでしたが、「二」「三」で一先ずやめました。宗教論の方で人間の生命の根源

及び死について考えて見ました。そしてキリスト教に対して仏教の特殊性、その優れた点にも論及いたしました。しかしうま雑誌も書物も出すことができぬ。「生命」のツヅキ「二」「三」も校正の終つた所で印刷所が焼かれました。第五論文集以後を集めた第六論文集も印刷中に焼かれてしまいました。

長女の急死には実にがっかりしました。近年特に親切に万事気をつけてくれ、頼もしく思い居りましたのに。一月中頃まいり一泊。達者で帰つて行きましたのに、一月半ば頃突然急死の報に接し、何とも云い様のない淋しさと悲哀の念に沈んで居ります。老いて子を先立たせた老人の心境をしみじみ味わいました。戦局ますます急に、真に國家存亡の秋、仰せの如く無策不活潑の有様、長大息の至りに堪えませぬ。家貧にして良妻をおもい、国危くして忠臣をおもうという語もありますが、今日の日本程、尊兄の言の如く大乗的な大人物を要する時はないと存じます。鈴木という人は忠良な人格者でしようが、考えは平凡な人らしい。これでは今日の大局の料理はできないと存じます。今日はもはや自信もないのに自信満々たる如く粋い、自慰に耽けつて居る時ではないと存じます。何処までも足を大地につけ現実に即して大方針を立て、一大決心をすべき時と存じます。思想問題にしても国家の自信を唯武力にのみつなぎ、やもすれば國体と軍部とを同一視する如き観を与える態度でなく、もつともと高い精神的立場に國体を置いて奮闘せねばならぬとおもいます。武力はいつも有利とばかりは云われない。万一の時にも國民が何處までも高い精神的國体に深く信念を有するかぎり、必ず又再起、大いに發展する時が来ると存じます。然らざれば万ーの場合、國民は自信を失つて再起の原動力を失う如き恐れなきか。こういうことも具眼者の考うべきでないか。私はどうかして我が國の國体、我が國の文化の上に世界的意義を見出し、新らしい日本をその上に打

75歳（1945年）

ち立てて行く様努力せねばならぬのでないでしょうか。久松君

久松君

手 昭和二十年四月十三日 ● 島谷俊三宛

（…）例の印刷につき、今丁度私の宗教論「場所的論理と宗教的世界觀」を書き終った所です。もう一ヶ月程よく考えをねり直さねばならぬと思うが、この方を先にやるもの一つの考え方ではないかと存じます。「十行二十字詰の原稿」にて一百七十頁位のものです。何となれば「生命」の「一」「二」の方は、とにかく「思想」の方にて出すと云つて居るのですが、此方は今一寸出版の当てがありませぬ。無論「思想」は出すと云つても当てにもなりませぬが。（…）

手 曜和二十年四月十四日（土） 宗教論一先ず了。（…）

日 曜和二十年四月十六日（月） 昨夜京浜西南地区爆撃、砲声殷々、閃光赫々、東京大船間電車汽
車不通。高坂来宿。新聞来ない。入浴。
日 曜和二十年四月十七日（火） 防空壕掘りはじめる。（…）

手 曜和二十年四月二十一日 ● 島谷俊三宛

十三日夜お認めのお手紙、只今拝見いたしました。私も原稿をお送りするについて不安にて心配いたして居りました。どうかそのようにしておもらいしたいと思うのです。「生命」の方は前に申し上げました様に、岩波にて又「思想」を出すことにいたし、校正もすんだということですから、この方はこれでよいかと存じます。唯今書いている「宗教論」の方を何卒お願いたしたいのですが。

この方は一通り終りましたが、来月十日にならないとすつかりすまないので、その頃に何方かお寄り下さる訳にはゆきますまいか。少し遅れても誰れかそういう方に托してお送り致したいと存じますが。（…）

手 昭和二十年四月二十一日 ●栗田賢三（東京 岩波書店）宛 鎌倉発

いつかお話しのデュヴェーの論理というものはJohn Dewey, Logic: The Theory of Inquiry（究明論学（探求論）），New York 1938 というのでないでしょうか。もしお持ちなのなら暫く拝借できませぬでしょうか。何方か御店から鎌倉の方へお帰りの方に托して下さったら、三木君が持つて居ると思いますが、三木君はどうしましたかしら。心配いたし居ります。

日 昭和二十年四月二十五日（水）日本ではヒットラーは天才だから敗れても新しい戦争形式を見出すという。女中花去る。（…）

手 昭和二十年四月二十七日 ●末綱恕一（長野県長地村）宛 鎌倉発

十五日東京からの御手紙、二十四日諏訪からの御手紙、本日同時に拝受いたしました。何から今まで老生の為に御親切に御考え下され誠にありがたく、厚く厚く御礼申し上げます。併なども大いに心配し、務台君などといろいろ骨折りくれるのでですが、先日申し上げました如く老人二人未知の地に参りましても色々の不自由なこともあるべく、何より信州などにてだんだん寒くなつて来ますと私はとても堪え難いかと存じ、私共はどうも気が進まないのでござります。唯、私も一番懸念に

SAMPLE
Shoseki-Shinsui.com

75歳（1945年）

なりますことは御手紙の如く万一にもこの辺が戦場となる如き恐れなきかということでございまし
た。御手紙の様でございますとにかく急な事もなからべく、とにかくさし当り落着きて差し
支えないのでないかと存じます。それにも萬一ということも考えて置かねばならぬと存じます
が。本日俸が参り務台君、下村君など相談いたし、とにかく文理の哲学の方が参りました伊那の方
の飯島とかいう所にまさかの為め家を借りて置こうと云うことです。もはや老耄、惜しき命でもござ
いませんが、これでよからうと存じます。尊兄には誠に御親切に御考え下され本当にありがとうございます。
何卒御安意下されたく御願い申し上げます。

食料の方は安部さんが實に親切に御世話下され、御蔭により室内とも感謝いたし居ります。家
内が周囲に少しばかりの野菜を作り居りますのと、時々安部さんの方へ御無心に上りますので、二
人だけでどうにかやって行けると思います。（もう女中も帰りました）。世が世なら晩年幸に尊兄な
どにお目にかかるを得て、老年ながらも色々研究もして見たいと思いますが、不自由な世となりま
した。しかしあつかは又日本も大いに学問文化の方面に全力を尽す時も来るだらうと思います。何
卒御自愛を祈ります。下村君などどうしていますか。文理の哲学科の疎開で忙しく致し居ることと
存じます。御大切に。 西田生 末綱君机下

手 昭和二十年四月二十九日 島谷俊三宛

印刷の方はすぐできる様に準備ができるので居るのでしょうか。この頃印刷が中々はかどらず、その
うち爆弾、焼夷弾でやられてしまうことが多い故、その辺御留意下されたり。気づかわれるような
ら先ず一つコピイを取つて置いた方がどうかとも思います。しかしそれでは遅れることにはなるが。

日 昭和二十年四月三十日（月）敵機多数来襲（京浜西方）。（：）

手 昭和二十年四月三十日 粟田賢三（東京 岩波書店）宛 鎌倉発

御手紙ありがとうございました。それでは誰か京都から来るものに頼みましょう。三木のことは本当に気の毒です。時節柄何とか御大切に。

日 昭和二十年五月一日（火）朝のラディオでヒムラーが英米に無条件降伏を申し込んで斥けられたという。ゲッベルの大言壮語、今いかにせしか。ムツソリニー、敵に逮捕せられたという。ドーチェ先生、自殺が恐かったか。醜態。

新聞界思想界の全くの見当違い。ムツソリニー等処刑（二十八日午後四時十分）せられたという。ミラノにさらさる。（：）

ペタンと対照的。ペタン元帥は裁判を受けるべくフランスへ帰った由。彼人の心事は実に同情すべきだ。彼人は後に省みられるであろう。

手 昭和二十年五月一日 朝永三十郎（京都）宛 鎌倉発

（：）御令息様の御宅も御災難の由、誠に御気の毒の至りに存じます。伴の處は荻窪の方なるが、まだ無事の様でございますが。この頃孫共（末娘の一族）が疎開して来ていますので騒々しくて困ります。B29、P51、いざれも百機位も入つて来ますので、皆々疎開々々とやかましくすすめますが、女中も戻らず老人二人でこの頃流行の信州辺りの知らぬ所へ疎開しても中々難儀とおもい、運

SAMPLE
Shinsui.com

75歳（1945年）

を天に任せて落ちつき居ります。先日の夜、京浜西部をやられた時、砲声殷々私の所の東方の例の茅^{カヤ}の山の方の空が真紅になりました。どうもひどい世の中となりました。今後いかがなるか。早く死んだ友人共が幸の様にも思い、又こんな時代を見るのも面白いともおもいます。独伊もみじめなものになりましたね。やはり全体主義というものはだめのものと存じます。御大切に。尚一度御逢いたいものです。御奥様にもよろしく。

朝永君

手 昭和二十年五月四日 ● 高坂正顕（京都）宛

鎌倉発

四月二十八日御投函の御手紙、漸く拝受いたしました。文部省教学局の態度委細承り、何という無責任な曖昧な態度でしよう。一体眞の理由は何処にあるのでしょうか。西崎氏は明石氏に学者の反対とか云つたそうですが。「生命」の論文を上諏訪でやつてくれるに云うこと、ありがたいと存じます。静岡の島谷の方はやめたいと思ひます。高山君の秋田屋の件というのはどういうことでしよう。何も聞いていませんがお知らせ下さい。それから先日御出での時御覽に入れた宗教論「場所的論理」と宗教的世界觀」ももう出来上りました。（十行二十字二百七十頁程）。これも印刷にでも、タイプの印刷にでもしたいと思うのですが、何か方法なきか。こちらにも色々考えていますが、又御考え下されたく存じます。今小包郵便にて原稿を送つても実に不安です。Copyを作りたいとも思つていますが（中々人手もなく）。もう一つ「生命」の前に書いた「空間」というものがあるのですが、これを第六論文集に入れる様に計画し、布川が出版に取りかかつたのですが焼けてしましました。私の所に元の原稿だけ残つて居るのでございます。 高坂君

手

昭和二十年五月六日

高山岩男（京都）宛

鎌倉発

先月二十四日の御手紙漸く本日拝受いたしました。拙文印刷の件につき色々御配慮下され、くれぐれも御礼申し上げます。宗教論の原稿はもう出来上りました。十行二十字詰原稿紙二百七十頁位のものです。大和書院とかにての哲学学術雑誌に出すという御考え、私はそれで結構と存じます。雑誌なら後に岩波での出版、一向差し支えないと存じます。しかし昨日布川が参り今度岩波にて「生命」論と宗教論とを別々に一冊ずつのパンフレットにして急いで出そうと云うのです。私はどちらでもよいが、いずれ布川が近日のうちに京都に行くと云っていますから、一応布川と御相談下さいませ。例の国体論の抜刷は第一回目には大変に遅れて私の手許に参りました。統いて二、三回と來ましたが、こんなに私方には入用ではございません。最初の御送り下さった分（十五、六冊）で結構でございます。余はついでにお返しいたしましょう。そちらにも置いて下さい。大拙の本つきました由、よろしゅうございました。この頃の郵便物は實に信用致し難く、極めて不安です。もうドイツもあの様になり、敵がじりじりやつてくれば長期となつても結局はむつかしいのではないかと思われます。どうも始めから主脳者の見当違いで致し方ありません。学生の力が大いに落ちました由、そうだらうと存じます。これから学生は尚々ひどくなるでしよう。全く情けないことです。しかし君などそれで教師がいやになるなど云うのでは困る。君などに大いにやつてもらわねばならない。今年はいつまでも寒い。まだ冬のままの着物で居る。

高山君

（日）昭和二十年五月八日（火）（：）P百機京浜へ来襲。（：）この頃の新聞、歐洲より英米軍の東向恐るに足らずと云う。徳富などヒットラーを南洲に比して居る。（：）

75歳（1945年）

日 昭和二十年五月十日（木）けさ波木居に原稿を渡す（宗教論原稿）。徳富は、日清日露と違つて今度の戦争に日本国民が気魄ない——つまり彼等の笛に踊らぬ——という。国民が徳富の如き指導者より頭が進んで居るのだ。グルーなど色々の実況をあげて日本の恐るべきを米国民に戒めて居る。徳富は敵を沖縄に撃破し尽すは天与の神機だという。

手 昭和二十年五月十一日 鈴木大拙宛

君の東洋文化の根柢に悲願があるということ、よく考えて見るとそれ非常に面白い。私もそういう立場から考えて行つて見たいと思う。その故に西洋の物の考え方がすべて対象論理的であつたのだ。この頃ユダヤ民族の宗教発展の歴史をよんでも色々考えさせられる。ユダヤ人がバビロンの捕囚の時代に世界宗教的発展の方の基礎を作つた。眞の精神的民族は斯くなればならぬ。民族の自信を唯武力と結合する民族は武力と共に亡びる。 大拙兄
伝灯錄等ありがとう。

手 昭和二十年五月十一日 鈴木大拙（円覚寺）宛 鎌倉發

大分暖くはなつて來たようだが私はまだ綿入二枚、シャツ二枚、冬の通りだ。お変りもなきか。ヒットラーも悲惨な末後を遂げた。無理が通れば道理が引つ込むという諺もあるが、無理はやはり遂には通らぬものらしい。今のは力信仰の全体主義が新しい行方のようにいうが、逆にそれは旧思想で最早時代錯誤であり、新しい方向は却つてその逆の方向に、即ち世界主義的方向にあつて、世界は不知不識その方向に歩んで居るのではなかろうか。

君の宗教論を拝見した。色々教えを受けた。同感する所多い。私はキリスト教に対し、仏教を哲學的に勝れた点があり、却つて将来に貢献するものもあるでないかと思う。キリスト教は論理的に主語的論理、対象論理だという。神を対象的方向の極に見て居るのである。絶対矛盾的自己同一の論理は一面般若即非の論理であると共に、一面にその自己限定として、即ち一と多との矛盾的自己同一、空間時間の自己同一、絶対現在の自己限定として、唯一なるもの即ち個が出て来るとおもう。全心即仏、全仏即人である。何とかして印刷にしてから御覧に入れたいと思っている。君のものも早く印刷にできるとよいが。花がいなくなつて一寸御返しする便がもうなくなつたので、小包で御返しする。近い所だから大抵大丈夫とは思うが、この頃の事故、何事も不安に堪えず。御落手の上は一報を乞う。 大拙兄

高山から君の「日本的靈性」をおもらいして大変礼を云つて來た。早速礼状を出したそなだが、手紙が着いたかどうかと。

手 昭和二十年五月十一日 ● 布川角左衛門（東京 岩波書店）宛 鎌倉発

先日は御多用の處をわざわざお出いで下さいましてありがとうございました。本日波木居君が出で下さいまして、原稿複写の事をすっかり同君にお願いいたしました。実はこの頃暫くでも原稿を東京へやつて置くことを不安に思つていましたが、同君が毎日鎌倉へ持ち帰る様にして写して下さると云うことに非常に安心いたしました。いつも同君に御面倒のことをお願いして誠にすみませぬ。どうかよろしく感謝の意をお伝え置き下さい。それから高山の秋田屋の話というのがその後（お出でになつた翌日）同君の手紙にて分りました。元、大和書院とかいう本屋だそうで、京都に編輯

SAMPLE Shodo-Shinsui.com

75歳（1945年）

部があり、今度年に四回位、哲学系の学術雑誌を出すことに相談ができ、その創刊号に私の「宗教論」を出したいと云うのだそうです。先日の（生命と宗教論を）パンフレットとして出すという話はすぐできますか否や。私はそれを御店の方にてすぐ実行しておもらいたいのです。私は高山にも高坂にも、布川君が来て岩波の方にてこういう話がある、布川君が近日京都の方へ行かれるから同君と相談してくれと返事いたして置きました。しかし高坂君の話といふのもprivate printというこことであるし、高山君の話も単に雑誌に出すと云うことであればそれはその方として置いて、御店の方にてそれにかかわらず一日も早く実現してもらいたい。今時、何時どちらがどうなるかも知れず、とにかく安全の地域にて印刷ができると云うなら一日も早くやつて置く方がよいのではないかと存じますがいかが。私は何とかして「生命」「宗教論」だけは一日も早く印刷か或いはタイプにでもして、せめて五十部か百部位でも刷つて置きたいとおもいます。京都の方へは何時お出でになりますか。

布川君

手

昭和二十年五月十一日 ●高坂正顯

（京都）宛 鎌倉発

手
昭和二十年五月十一日 ●高坂正顯（京都）宛 鎌倉発

先日申し上げました諒訪辺（哲学会）にて「生命」のprivate printの件につき、岩波の方にて、先便に申し上げた様に、パンフレットとして出すと申し居り、布川が近日そちらに行くと云うことですが、私はこの際二重になつても、できるだけ早く安全地帯にて出して置く方がよいのでないかと存じます。

手

昭和二十年五月十一日 ●下村寅太郎

（長野県上伊那郡）宛 鎌倉発

八日に御投函の御手紙、本日拝受いたしました。図書の疎開は大変でございましたでしょう。生きの疎開のことにつき色々御配慮下されありがとうございました。大変よさそうな所にて満足に存じます。家もいすれにてもそれ位の所は結構と存じます。お考えに御任せいたします。食物もそれで結構と存じます。唯私の恐れるのは冬の寒さでございます。年とるに従い寒さには実に堪え難く、これのみ心配でございます。

今ありのままに私共の気持を申し上げますと次の通りでございます。今ここから荷物を送り出すということが殆んど不可能であり、切符を買うことも大変なり。飛行機は始終頭上を通りますがこの辺は投弾もいたさず、特に鎌倉でも私の谷の如き処は安全地帯かと存じます。無論直撃弾を受ければそれまでだが、それはどうも運命とあきらめる外ないと存じます。後の山に大きな壕を掘りました。少し前に女中も帰つてしまいまして、今は私共老人二人きりになりました。二人きりにて未知の処に何から何までも人の御世話になるのも心苦しくも存じます。それに暫く二、三日という様ならまだしもですが、半年になるか一年になるか分らず、何も持つて行かれない（今は三個位の外許されず、これも中々むつかし）とすればかなり長く不自由の生活をせねばならぬかと存じます。そんなこと色々考えまして、兩人共に尻込みいたします。できるならこちらにてと思い居る次第でござります。

しかし戦況次第にてこの辺もどうなることか分らず、形勢によつてはそんなことを云つて居られなくなるかも知れないと存じます。万一の場合ということを考えて置かねばならぬと存じます。それで先日外彦が参り、万一の場合としてとにかく逃げる準備に御地に家をお借りして置いた方がよろしかろうと云うので、そう云う様に考えて居ります。万事外彦に任せました。何卒万事外彦と御

SAMPLE
Shishi-Suite.com

75歳（1945年）

相談お定め願いたいと存じ居ります。家はそのどれでも結構かと存じます。万ーの場合にはもとより荷物などは持つて行くという訳には行かぬと存じ、殊に冬になつては尚々困ると存じますが、万ーの場合にはその辺にて何とか少しの日常品（例えば着物、夜具など）を借りる様な事ができますものか。いかが。 下村君

手

昭和二十年五月十二日

高坂正顯（京都）

宛 鎌倉発

（…）前便申し上げました様に、私は紙さいあらば「生命」論を諏訪でもやつてもよくはないかと存じます。岩波すぐできるならよいかも知らぬが。私は全く尊兄にお任せします。

手

昭和二十年五月十三日（日）（…）波木居、原稿の写しを持って来てくれた、大安心。

手

昭和二十年五月十六日

島谷俊三宛

（…）印刷のこと、岩波は出すことは出しますが、印刷所を新潟に移してということ故、尚大部日を要することと存じます。いつになりますかは不明。この頃の事故、安全地帯と云つても何時もう何處でも出版などできないと云うことにもならぬとはかぎりませぬ。そう考えるととにかく何でも安全の所にて一日も早くやつて置くのがよいのではないかとも考えます。高山の方でいつ出せるのかと聞いてやつて居ります。その返事次第にてとにかく尊兄の方にて一日でも早くやつておもりいするものが、一番良策ではないかとも考えて居ります。原稿はもうすっかりできて居ります。それで尊兄の方にて、

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

一、印刷屋に於て大体どれ位の時日にてできるか。十行二十字詰ノ原稿用紙二百七十頁位ノモノ。

二、右印刷費用、凡そどれ程。

三、今鎌倉から原稿を送ることができないから（鎌倉から小包禁止）先日のお話の様に尊兄の方の生徒にてこちらに寄つてくれる人ありや。

右、一寸お知らせお願い申し上げます。

手 昭和二十年五月十九日 ●高坂正顯（京都宛 鎌倉発）

十六日の御手紙拝見いたしました。布川は京都へいつ参りますか。私にすぐ行く様云つていまし
たが、彼の尊兄への手紙にいかがありませんか。私はこの際なるべく早く安全の地にて印刷したい
とおもいます。諏訪の方でも秋田屋の方でも。宗教論の原稿もすっかりでき上つています。何時で
も御渡しできる様に。しかし印刷屋へすぐCopyを渡したくない。諏訪の如き所ならよいが、大阪で
も京都でも印刷屋など何時やられるかも知れないと思います。それで先ずこれはCopyを取りたいと
思います。これまで家内にやつてもらつたのですが、女中が帰り今は婆さん一人烟作りやら何かで、
とてもその暇もないのです。高山君が来てくれるのは誠にありがたい。そうすれば何事もすっかり
頼まれるとおもいます。この頃旅行は中々気の毒だが。（：）

手 昭和二十年五月二十日 ●西田外彦宛

この雨のふる中にランケわざわざ来て下みませぬでした。別に気持が變ったという訳では
ありません。先日の御話通りに考えて居るのでございます。唯、万一の場合に準備をいたし置くに

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

75歳（1945年）

つき、下村の手紙などよい参考になると存し、早速お送りいたした次第です。それから布川の話も同様のことにて、こちらからはとても何も送る訳にゆかぬから、万一の場合、多少の炊事、食器、冬の夜具等のもの借りて置きたい。今ならまだそんな事もできるかという布川の話故、そんな事を頼みたいくらいです。下村の方へも一寸そんな事を頼んでやりました。とにかく下村が先方に居る事故、万事具体的に話しができて確実かと存じます。そして下村にも布川にも万事外彦に任せて居るから外彦と相談してくれと云つたのです。下村、務台、布川と直接お話し下されたし。布川には外彦は日中日野の工場に出て居るから、電話にて話してくれと云つて置きました。日野の電話番号を布川に知らせて置いた方よからう。戦況もどうなるか。沖縄の決戦にて大分又様子が分つてきはせないか。
父 外彦様

手

昭和二十年五月二十日

● 布川角左衛門

(東京) 岩波書店 宛

鎌倉発

波木居君には誠に性急な御無理なことお願い申し上げましたのに心よくお引き受け下され、驚くべき速さを以てお写し下され、御芳情真にありがたく深く感謝いたし居ります。何とかして感謝の意を表したく存じ居ります。いかにすべきや。生命と宗教論のパンフレットは、なるべく早く、できるものから一冊づつお願い申し上げます。いずれ後に第七論文集に入れるもの故、一冊毎に、出るに従つて第七論文集分冊と隅に小さく名づけていかが。印刷の方はできる様になりましたか。別紙は跋文として今度出版の第六論文集の終につけて下さい。序文の方はあのままにして始めに出版して下さい。目次には、五 空間、の次に「六 数学の哲学的基礎附け」を入れること。

布川君

手

昭和二十年五月二十日 ●田辺元（京都）宛

鎌倉発

久しぶりにて御手紙拝見いたしました。御議論、御高見、憂国の御精神、敬服の至りに存じます。及ばずながら私共も今日いろいろの意味に於て 皇室がお出ましになる外ないかと存じ居ります。先に近衛公その他にもそんな事を話したこともあります。しかしそれには先見の明があり強固な意志と実行力のある輔佐の偉人がなければならぬと存じます。近衛公など余程聰明の人とは存じますが、まだ何だか少し囚われて居る様に思われる所もあり、それにあの人はそれだけの力量のある人なのでしょうか。宮様も大変御聰明の方であり憂国的情に富ませられる御方と承り居ります。宮中の御関係など我々に分りませぬ。何事も実行ということには尚一方の勢力というものが尚中々むつかしいのではないか。原田君なども、お話しの宮様へは多少連絡もあるのかと存じますが、先達つてより憲兵の取調べを受けて居り、一時近衛君などの方も皆心配いたしました。近衛君なども一派のものから狙われ居り、邪魔せられ自由ならぬ所あるのではないでしようか。

現実は否応なしに漸々押し進めて行く様です。この頃大分分つて居る人もあると存じますが、そういう人に力なく、実行々々と云つて居る人は實に分らない。中学生位の頭しかありませぬ。人格者があつても政治家はありません。我が国の政治家は實に思想貧弱と存じます。

いつか御相談申し上げました御教育の人の件も私の意見は採用せられず、他の人になりました。すみませぬでした。御叱りを受けることと存じますが、何事にも意氣地なくお恥ずかしい次第です。老耄何の役にも立ちませぬ。何卒若い人々の御奮闘をいのります。 西田生 田辺学兄硯北

手

昭和二十年五月二十五日 ●島谷俊三（静岡）宛

鎌倉発

75歳（1945年）

昨日は御電報ありがとうございました。早くもCopyができました由、安心いたしました。岩波でも一つCopyを作ってくれました。（とにかく写しが二、三もできて居れば）これで安心と存じます。一昨夜の空襲は静岡へも行きし由、実は少し心配いたし居りましたが無事なりし由、安心いたしました。その後、高山君より何の返事もまいらず、できることはできるのならんと存じますが、まだいつともはつきり時日が分らぬのかとも存じます。

早くそちらでやつてもらつた方がよいかと存じ居ります。印刷は全く一時的のものですから、どんなにまづくてもよろしい、字がよめるだけのものでよろしくうございます。唯、校正さいよくできますれば。紙は上田方にあるだけで、せいぜい百部もできれば十分です。五十部位でもよろしい。必ず別に御配慮ない様に願います。印刷費の方がどれ程になりますか。とにかく私の方にて一時何とかして置かねばならぬと存じます。大凡の所をお知らせ下さい。この頃の様では他に送り出すことできますかしら、希望者に配達できますかしら。（鎌倉の方では今小包も第四種郵便も受け付けてくれませぬ。静岡の方はそうでもない様だが、どうなるかも知らぬ）。岩波の方は中々急にはむつかしくと存じますが、高山の方はいかが。此方早く出るならこちらの印刷もむだとなると思いますが未だ返事来たらず。

すぐCopyができまして本当に喜ばしく存じます。大いに急いでおやり下さつたことと存じ、恐縮に存じます。どうか原稿はなるべく安全に。
島谷君
何から何までいろいろ御世話になります。

● 昭和二十年五月二十七日（日）（：）島谷、印刷着手の手紙。湯タンポやめ。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

手

島谷俊三宛

二十四日朝のお手紙拝受致しました。いよいよ印刷に御取りかかり下さいました由、誠にありがとうございます。何卒宜しく。「生命」二、三、「思想」に出れば無論早速お送りいたしますが、岩波は印刷屋を田舎へ移してからと云うので、いつになるのか分らない。これも早く何とか高坂の話の様に諏訪辺りにて印刷した方がよいかも知らないがと思い居ります。

日

昭和二十年五月三十日（水）（：）「論理について」を始める。

20

日

昭和二十年六月一日（金） ウス曇

著書目次一覧

以下に示すのは、西田幾多郎が単行本として出版した（ないし出版の意図を持っていた）ものの目次一覧である（最後の『「統思考と体験」以後』は例外で、死後しばらくしての出版物である）。

書肆心水既刊のテーマ別論文選に収録のものはそれぞれ左記の印を附した。

エツセンシャル・ニシダ 即

エツセンシャル・ニシダ 即の巻

エツセンシャル・ニシダ 命の巻

エツセンシャル・ニシダ 国の巻

種々の哲学に対する私の立場 西田幾多郎論文選

実践哲学について 西田幾多郎論文選

真

実

私

国

命

即

エツセンシャル・ニシダ 命の巻

エツセンシャル・ニシダ 国の巻

種々の哲学に対する私の立場 西田幾多郎論文選

実践哲学について 西田幾多郎論文選

真善美 西田幾多郎論文選

善の研究

明治四十四年（一九一一年）
41歳

序

（再版の序）

（版を新たにするに当つて）

第一編 純粹経験
第一章 純粹経験

第二編 実在	第二章 思惟
第一章 考究の出立点	第三章 意志
第二章 意識現象が唯一の実在である	第四章 知的直観
第三章 実在の真景	
第四章 真实在は常に同一の形式を有つて居る	
第五章 真实在の根本的方式	
第六章 唯一実在	
第七章 実在の分化発展	
第八章 自然	
第九章 精神	
第十章 実在としての神	
第三編 善	
第一章 行為上	
第二章 行為下	
第三章 意志の自由	
第四章 値値的研究	
第五章 哲理学の諸説其一	
第六章 哲理学の諸説其二	
第七章 哲理学の諸説其三	
第八章 哲理学の諸説其四	
第九章 善（活動説）	

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

著書目次一覧

序	大正四年（一九一五年） 45歳
（増訂版の序）	
序	
（三訂版の序）	
第一章 善の研究	人格的善
第二章 善の形式	善行為の動機
第三章 善の内容	善行為の目的
第四章 完全なる善行	完全なる善行
第五章 人格的善	人格的善
第六章 善行為の動機	善行為の動機
第七章 善行為の目的	善行為の目的
第八章 善行為の内容	善行為の内容
第九章 宗教	宗教
第十章 宗教的要求	宗教的要求
第十一章 宗教の本質	宗教の本質
第十二章 神	神
第十三章 神と世界	神と世界
第十四章 知と愛	知と愛
第十五章 思索と体験	思索と体験
第十六章 法則	法則
第十七章 認識論に於ける純論理派の主張に就て	認識論に於ける純論理派の主張に就て
第十八章 論理の理解と数理の理解	論理の理解と数理の理解
第十九章 自然科学と歴史学	自然科学と歴史学
第二十章 高橋（里美）文学士の拙著	高橋（里美）文学士の拙著
第二十一章 ベルグソンの哲学的方法論	ベルグソンの哲学的方法論
第二十二章 ベルグソンの純粹持続	ベルグソンの純粹持続
第二十三章 現代の哲学	現代の哲学

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

コーヘンの純粹意識
ロッツェの形而上学
認識論者としてのアンリ・ボアンカレ
トルストイについて

愚禿類讐

「小泉八雲伝」の序

「国文学史講話」の序文
追録 「物質と記憶」の序文

自覚に於ける直観と反省

大正六年（一九一七年）

47歳

序 (改版の序)

序論

一―三 (自覚の意義・種々の疑問)

四―六 (意味と存在)

経験体系の性質

七―十 (純粹思惟の体系)

十一―十三 (純粹思惟の体系から経験体系への推移)

十四―十六 (知覺的経験の体系)

十七―二十 (意識の問題・主客の関係)

二十一―二十三 (直線の意識)

二十四―二十五 (反省の不可能)

経験体系の聯結

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

著書目次一覧

序	（改版の序）	意 識 の 問 題	大正九年（一九二〇年）	五〇歳
跋	意 識 と は 何 を 意 味 す る か	四十一 四十一（絶対自由の意志）	二十六一二十九（種々のアブリオリの統一・知識客觀性の發展）	
感 情	感 觀	四十二 四十二（思惟と経験）	三十一三十二（数から空間への發展）	
象徴の真意義	意 識	四十三 四十三（種々の世界）	三十三一三十四（直線の意 識）	
意 志	経験内容の種々なる連続	四十四 四十四（意味と事実）	三十五三十九（知覺的経験の体系・精神と物体・意志の優位）	
意志実現の場所	意 志			
意志の内容	意 志			
関係に就いて	意 志			

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

意識の明暗に就いて

個体概念

ライプニッツの本体論的証明

芸術と道德

大正十二年（一九二三年）

53歳

序

真美の本質

マックス・クリンゲルの「絵画と線画」の中から

感情の内容と意志の内容

反省的判断の対象界

真善美の合一点

社会と個人

作用の意識

行為的主觀

意志と推論式

真美と善

法と道德

真真と美

真真と善

働くものから見るものへ

昭和二年（一九二七年）

57歳

序 前篇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

著書目次一覧

無の自覺的限定

昭和七年（一九三二年）
62歳

総 説

自覺的一般者に於てあるもの及それとその背後にあるものとの關係
一般者の自己限定

直覺的知識
觀知的世界

序
即述語的論理主義
所謂認識対象界の論理的構造

一般者の自覺的体系

昭和五年（一九三〇年）
60歳

●私即場所
左右田博士に答う
知るもの

●即場所
働くもの
後篇

直接に与えられるもの
直觀と意志
物理現象の背後にあるもの
内部知覚について
表現作用

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

表現的自己の自己限定

場所の自己限定としての意識作用

私の絶対無の自覚的限定といふもの

即 永遠の今の自己限定

時間的なるもの及び非時間的なるもの

自愛と他愛及び弁証法

自由意志

即 私と汝

即 生の哲学について

哲学の根本問題（行為の世界）

昭和八年（一九三三年）

63歳

序

一 形而上学序論

二 私と世界

総 説

哲学の根本問題 続編（弁証法的世界）

昭和九年（一九三四年）

64歳

哲学の根本問題 続編（弁証法的世界）

昭和九年（一九三四年）

序

一 現実の世界の論理的構造

即 二 弁証法的一般者としての世界

三 形而上学的立場から見た東西古代の文化形態

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

著書目次一覧

<p>哲学論文集第一——哲学体系への企図 昭和十年（一九三五年） 65歳</p> <p>SAMPLE Shoshi-Shinsui.com</p>	<p>序 一 世界の自己同一と連続 二 行為的直観の立場 図式的説明</p>	<p>統思索と体験 昭和十二年（一九三七年） 67歳</p>	<p>序 一 取残されたる意識の問題 二 人間学 三 歴史 四 私の立場から見たヘーゲルの弁証法 五 教育学について 六 希臘哲学に於ての「有るもの」 七 アウグスチヌの自覚 八 プラトンのイデヤの本質 九 フランス哲学についての感想 十 ボルツァーノの自伝 十一 数学者アーベル 十二 ゲーテの背景 十三 書の美 十四 国語の自在性</p>	<p>命</p>
---	--	--	---	----------

- 十五 知識の客觀性
十六 四高の思出
十七 或教授の退職の辭
十八 鎌倉雜詠
十九 訳詩
二十 煙炉の側から
二十一 書影宋本爾雅後
二十二 歌並詩
- 哲学論文集第二 昭和十二年（一九三七年）
序 67歳
- 命一 論理と生命
実二 実践と対象認識——歴史的世界に於ての認識の立場
三 種の生成發展の問題
即四 行為的直觀
五 図式的説明
- 哲学論文集第三 昭和十四年（一九三九年）
序 69歳
- 即一 人間的存在
即二 歴史的世界に於ての個物の立場
即三 絶對矛盾的自己同一
四 経驗科學

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

著書目次一覧

五 圖式的説明

国 日本文化の問題 昭和十五年（一九四〇年）

70歳

哲学論文集第四 昭和十六年（一九四一年）

71歳

序 実一 実践哲学序論

実二 ポイエシスとプラクシス（実践哲学序論補説）

三 歴史的形成作用としての芸術的創作

四 国家理由の問題

哲学論文集第五 昭和十九年（一九四四年）

74歳

序

一 知識の客觀性について（新なる知識論の地盤）

即二 自覺について（前論文の基礎附け）

哲学論文集第六 昭和二十年（一九四五）

序

一 物理の世界

二 論理と數理

国私私五四三予定調和を手引として宗教哲学へ
伝統デカルト哲学について

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

六 空間
七 数学の哲学的基礎附け

哲学論文集第七

昭和二十一年（一九四六年）

哲学論文集第七

昭和二十一年（一九四六年）

即命一 生命
即二 場所的論理と宗教的世界觀
跋（西田外彥）

「続思索と体験」以後

昭和二十三年（一九四八年）

ギリシャ語／アブセンス・オブ・マインド／トマス・アクイナスの全集／
コニク・セクションス／明治の始頃／金沢の古本／三宅真軒先生／古義堂を訪う記／
若かりし日の東園／読書／吾妻鏡／高木博士の「近世数学史談」／
明治二十四五年頃の東京文科大学選科／山本晃水君の思出／木村栄君の思出
附録
北条先生に始めて教を受けた頃／上田弥生の思出の記／私の論理について（絶筆）／
御進講草案歴史哲学ニッイテ
あとがき（西田琴）／

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

宛名索引

三宅剛一 269, 270, 271, 363, 418, 422, 427, 482, 483, 500, 553, 598, 606, 610, 612, 622

宮本和吉 152, 160

務台理作 198, 208, 218, 224, 235, 240, 250, 251, 255, 258, 262, 266, 271, 272, 283, 288, 330, 411, 423, 435, 439, 441, 442, 456, 466, 467, 474, 480, 490, 491, 496, 507, 512, 515, 517, 518, 524, 526, 536, 547, 548, 550, 561, 572, 583, 600, 622, 625, 628, 629, 635, 637, 638, 641, 642, 643, 645, 663

◆や 行

安成三郎 443

柳田謙十郎 477, 481, 485, 487, 488, 495, 498, 505, 519, 527, 535, 544, 570, 585, 602, 607, 608

山内得立 199, 204, 211, 220, 223, 253, 262, 267, 278, 301, 336, 368, 369, 377, 379, 567, 571

山本良吉 51, 52, 53, 56, 58, 63, 67, 77, 79, 82, 87, 121, 129, 130, 168, 176, 184, 189, 190, 191, 192, 193, 195, 205, 206, 219, 222, 238, 242, 261, 263, 269, 271, 275, 281, 297, 299, 302, 309, 310, 311, 323, 324, 328, 334, 335, 337, 372, 375, 381, 386, 387, 388, 398, 400, 412, 413, 415, 416, 417, 429, 434, 445, 461, 462, 473, 475, 476, 477, 481, 484, 497, 508, 509, 514, 520, 523, 524, 525, 529, 533, 534, 535, 540, 541, 549, 552, 553, 558

由良哲次 340, 341, 369

◆わ 行

和辻哲郎 227, 228, 230, 231, 232, 234, 236, 248, 259, 260, 304, 312, 315, 317, 322, 335, 389, 390, 394, 396, 419, 433, 442, 457, 458, 463, 479, 544, 548, 580, 581, 603, 605

- 長与善郎 245, 531, 608, 658
西田麻子 276, 279, 281, 284, 291, 313, 314, 330, 334, 338, 339, 365, 367, 370,
371, 388, 395, 397, 398, 413, 472, 545, 551, 592, 651 →上野麻子
西田梅子 333
西田幾久彦 380
西田琴 607
西田寿美 184, 185
西田静子 243, 244, 246, 254, 287, 333, 395, 407, 408, 410, 415, 420, 421, 423,
424, 425, 426, 453, 528, 564, 586, 587, 590, 596, 599, 600, 609, 614, 615,
624, 625, 632, 638, 639, 650
西田外彦 212, 215, 279, 291, 313, 314, 339, 412, 413, 428, 432, 437, 470, 471,
472, 522, 547, 592, 652, 680
西田友子=小林友子 336
西谷啓治 391, 449, 452, 540, 569, 581, 582, 607, 635, 642, 643
布川角左衛門 441, 504, 544, 556, 603, 623, 644, 653, 654, 676, 681
◆は 行
林軍治 178
林達夫 446
原田熊雄 421, 438, 443, 464, 465, 469, 471, 476, 489, 493, 509, 510, 543, 555,
556
久松真一 163, 192, 193, 200, 225, 227, 233, 234, 238, 239, 248, 253, 265, 267,
273, 283, 286, 287, 290, 295, 306, 308, 405, 407, 416, 418, 447, 455, 458,
472, 493, 500, 502, 513, 514, 519, 531, 552, 553, 565, 566, 570, 584, 592,
621, 667
日高第四郎 440
藤岡作太郎 87, 88, 89, 91, 92, 93, 95, 96, 97, 98, 100, 101, 107, 113, 115, 117,
120, 123
フッサール, エトムント 242
堀維孝 84, 86, 91, 93, 126, 128, 136, 153, 278, 293, 294, 296, 297, 298, 299,
300, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 310, 320, 325, 327, 332, 333, 334,
336, 339, 364, 366, 383, 384, 389, 392, 394, 413, 414, 416, 417, 418, 428,
429, 430, 431, 432, 433, 447, 448, 450, 451, 472, 474, 503, 510, 511, 521,
526, 528, 532, 541, 546, 547, 549, 550, 551, 552, 553, 557, 559, 560, 563,
580, 595, 610, 614, 619, 628, 630, 640, 661
本多謙三 460
◆ま 行
牧健二 652

宛名索引

桑原政栄 79

高坂正顕 274, 397, 406, 419, 429, 453, 454, 457, 459, 460, 461, 466, 478, 489,
497, 505, 527, 537, 554, 586, 611, 633, 665, 673, 677, 679, 680

高山岩男 655, 674

小林全鼎 335, 374, 378

◎さ 行

三々塾 136

下程勇吉 436, 469, 575, 594

島谷俊三 475, 502, 662, 666, 667, 669, 671, 679, 682, 684

島野三秋 525

下店静市 562

下村寅太郎 419, 437, 439, 447, 450, 456, 483, 484, 488, 503, 512, 518, 538,
542, 544, 546, 559, 568, 572, 583, 589, 598, 605, 615, 646, 648, 677

末綱怨一 572, 574, 594, 596, 612, 615, 617, 620, 626, 645, 654, 663, 670

鈴木大拙 71, 102, 260, 264, 305, 308, 331, 334, 425, 435, 437, 462, 467, 468,
506, 508, 539, 552, 554, 560, 564, 576, 578, 584, 589, 591, 593, 606, 633,
647, 652, 657, 658, 660, 675

◎た 行

滝沢克己 406, 455, 469, 480, 492, 499, 504, 506, 529, 533, 541, 566, 588

武見太郎 530

田辺寿利 577, 578, 580, 582, 583, 584, 601, 606, 641

田辺元 144, 145, 150, 151, 155, 156, 157, 158, 159, 161, 162, 164, 165, 166,
169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183,
196, 197, 202, 203, 231, 233, 234, 239, 240, 241, 245, 247, 249, 250, 251,
252, 255, 256, 257, 259, 260, 264, 265, 266, 270, 272, 277, 278, 281, 286,
287, 288, 292, 321, 326, 328, 494, 682

田部隆次 75, 104, 106, 109, 110, 112, 118, 122, 124, 131, 132, 133, 138, 139,
140, 141, 142, 154, 156, 159, 163, 166, 167, 169, 175, 185, 195, 196, 268,
320, 390, 468, 563, 609

谷川徹三 418, 561, 595

津田青楓 367

津田左右吉 624

土田杏村 190, 192, 194, 223, 256, 331

戸坂潤 328, 396, 399, 436, 449, 462

朝永三十郎 186, 188, 672

◎な 行

内藤湖南 373

宛名索引

363 ページ以降が後篇

◆あ 行

- 相原良一 565
天野貞祐 494
栗田賢三 670, 672
出隆 301, 305, 399, 402
伊藤吉之助 400
岩波茂雄 228, 235, 236, 237, 273, 274, 280, 282, 310, 330, 332, 368, 372, 374,
375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 394, 403, 405,
406, 408, 414, 554, 566, 588, 590, 591, 609, 624, 625
植田寿蔵 246, 252, 277, 402, 456, 599, 604, 620, 639
上田久 651
上田操 649, 650
上野麻子=西田麻子 232
臼井二尚 365
逢坂元吉郎 396, 409, 410, 453, 507
小川恂藏 127
長田新 602
小島祐馬 494
沢瀉久敬 562, 593, 621, 629, 631, 632, 634, 644, 647, 659, 661, 664

◆か 行

- 片岡仁志 530, 563
勝部謙造 329, 374
鹿野治助 438
河合良成 105, 116, 139, 370, 441
菅円吉 402, 440, 453, 588
木戸幸一 486, 532, 536, 538
木場了本 209, 501
紀平正美 132, 133, 134, 137
木村素衛 274, 325, 373, 374, 375, 386, 391, 393, 411, 424, 426, 504, 513, 515,
522, 527, 539, 576, 587, 596, 597, 601, 606, 631, 653
桑木或雄 167, 216, 618
桑原政明 75